

## 「美の滋賀」アドバイザー会議 概要（2016年2月9日開催）



・配布資料に基づき地域の元気創造・暮らしアート事業および新生美術館整備状況について説明。

（1）地域の元気創造・暮らしアート事業について ・スライドにより説明

（2）MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUMU（成安造形大学近江学研究所 加藤賢治氏）

- 4年前から「キャンパスが美術館」を始めた。春と秋は芸術月間とし、一つのテーマに沿った展覧会を行っている。平成27年は「MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUMU」を実施。テーマを MUSUBU（むすぶ）、結（ゆい）、つながりとした。
- glaf の服部滋樹さんが滋賀のブランディングに関わっておられ、成安造形大学の近江学研究所や北川陽子さんのファブリカ村で出会った時に大学の取組を紹介。服部さんがリサーチした滋賀にしかない人のつながり、暮らしが見えるものと、近江学研究所が今までやってきたものを合わせて展覧会をやることになった。
- ただ並べるだけではなく、未来につながる意味を込めて「空想」という言葉を入れ、未来につながることを学生も提案した。
- 「歴史」というカテゴリーでは、千年の歴史がある近江八幡の松明祭りを基にヨシの松明を結ぶ藁縄（男結び）を習い、100個作成。また、近江八幡の千僧供町に伝わる「けまん結び」も作り、大学のバスストップの壁に展示した。
- 「近江学の現在」というカテゴリーでは、大学が有する浮世絵コレクション、五個荘の小幡（おばた）で作られ、300年の歴史がある小幡人形（土人形）とその型、先人の知恵の詰まった木船（湖に沈めて保存）、木船を再利用した大津絵、解体した仏壇のパーツ（仏壇のお洗濯）などを展示した。
- 「資源と営み」というカテゴリーでは、「びわパールまるとブランディング事業」（所管：県水産課）を活用しながら、淡水真珠の再利用を提案。再利用することを発信して、ブランド向上に取り組んだ。
- デザイナーの協力を得ながら、イケチョウ貝を再利用して貝ボタンや茶室の水差しの蓋を作った。

- びわパールの粉を混ぜた陶土や釉薬で焼き物を作り、粉の割合でどうなるかを展示。また、貝の粉を入れたびわパールインクを印刷業者と共に開発。さらに、びわペーパーも作った。
- びわパールインクでどれぐらい細い線が出せるのかを含め、片面が、滋賀県のポテンシャル（等高線だけ、川と湖だけ、中世の港だけ、湧き水と山だけ、旧街道と現代の道だけ、びわパールの養殖場だけ）を分解したマップ、もう片面はその全てが重なったマップを作成。地名は一切無いが、形を見ることで滋賀を感じてもらおう MUSUBU 地図、近江学全図を作成。
- ワークショップを開催し、近江八幡のヨシ松明を大学のグラウンドに立てていただき、クロージングパーティーの時に燃やした。
- 「人々」というカテゴリーでは、卒業生でもあり、世界で活躍している写真家 川内倫子さん（五個荘出身。たねや情報紙「ラコリーナ」の写真やエッセーを担当。）が撮った写真展示を行った。
- 「MUSUBU SHIGA」というカテゴリーでは、ブランディングディレクターの服部氏が見つけた滋賀のいいものを展示。（朝宮茶、政所茶などお茶の原点、淡水真珠、木地師発祥の地）
- 「空想 MUSEUMU」では、学生の作品を展示。8人の学生が、滋賀のいいものを探した。（ジャコのなれずしの食文化、木之本の和楽器の弦（生糸）など）
- クロージングパーティーは高島の和ろうそくで晩餐会を開催。びわパールの酒器で地酒を味わった。
- これらの取組は「美の滋賀」のフェイスブックでも発信され、過去最高の 1,796 人が参加。いろんな方の関わり、つながりがあったことが大きい。来年度以降も実施していきたいと考えている。
- 東京原宿の VACANTO でもミニ展覧会が開催される。

（アサダ）以下敬称略

- 「地域の元気創造・暮らしアート事業」は、モデル事業も含めて、コーディネーターとして3年間関わらせてもらっている。参加団体も増え、委託と補助という役割分担を行う中で、個々の活動の充実を感じる。また、しっかり記録をして発信する部分で、写真が随分変わった。ちゃんと記録をし、いい写真を撮影し、言葉にさせていただき、広報事業もコーディネートする中で、この事業全体の発信が難しいと感じている。それは、「美の滋賀」って何？ということにつながる。「美の滋賀」の編集が難しい。よく言えばどうとでも捉えられる。
- 丁寧に「美の滋賀」の幅を出しながら、一つの方向に打ち出すというよりは、そのままを見せながら、例えば写真でちゃんと見せていき、感じていただきながら、見る人が個々に共通性を見出していくような、でも、完全に丸投げではなくて、多少何かを発信していかないと、どうとでも捉えられるので、滋賀県という固有性と、でも、解釈は自由に「美の滋賀」を考えてください、というバランスをどう考えていくのかと思う。
- 服部さんには「地域の元気創造・暮らしアート事業」の審査にも関わっていただいたが、ブランディングは目的がはっきりしているので手法が見えやすいが、「地域の元気創造・暮らしアート事業」は、「地域づくり」と「アート」、ももとの「美の滋賀」の概念を発信するといういろいろなものが入っている中で、発信していく議論を詰めていくための最低限の材料を揃えなければならないと思っていたので、今、写真集という形で発行できるように進めている。
- フェイスブックでも発信して、まず目に触れて、議論をするための最低限の土壌を整えて出すところまでいけたら、「美の滋賀」って何？ということ議論できるようになっていくのかなと思っている。

（上田）

- 地域の元気、地域づくりという視点で、この事業を見ていきたい。成安造形大学の MUSUBU SHIGA の取組と地域の元気がどうつながっているのか。また、参加する学生自身が「美の滋賀」に関して何らかの気付きがあったのか。また、成安造形大学の学生さんや加藤さんご自身が「美の滋賀」に対して気付きがあったかなどについて聞きたい。
- 資料 2 にも印刷されているが、「しがのアートマップ美の滋賀マンガラ」マップを作成した。このマップのコン

セプトは「MEETS」だ。これは鷺田先生に示唆いただいた。その時のエピソードで面白かったのは県内で出土した高さ2cmほどの土偶をアール・ブリュット作家の戸次（ベッキ）さんの小さな粘土人形の作品群の中に紛れ込ませて「MEETS（ミーツ）」させようとしたら、「アール・ブリュットと文化財を並列して混ぜて紹介するのはいかがか。」というような声が上がったりして、結果的に土偶の方を丸い枠で囲んで区別することで決着した。事例報告を聞きながら、様々な事業の場で、様々な個性と背景をもった美の要素、あるいは美を形作る主体同士が MEETS し結ばれ、あるいは出会いがしらにぶつかって一旦砕けた後で、思いがけない姿や偶然をまとして、イノベティヴに再統合されたり、再編されていく。美の滋賀とは、そんなハプニングを誘発する事業であり、場なのではないか、と思った。

- 私自身は、観光関連の審議会にも参加しているが美の滋賀、MUSUBU SHIGA 等の事業は観光事業にも親和性が高いと思われるにもかかわらず美の滋賀事業と観光との関わりがはっきり見えてこない。県庁の中では縦割りで難しいかもしれないが、現場では連携が取れてきていると感じた。また、琵琶湖八珍などがある中で、食べるということにもつながっていくと面白いと思う。

(北川)

- (地域の元気創造・暮らしアート事業の) 委託、補助以外にもいろいろなことが起こっていると思う。「美の滋賀」が多様すぎて、こんなこともあんなことも全部「美の滋賀」だという中で、アートについては自分には関係ないと思っていた人も、暮らしそのものも「美の滋賀」ということで、そこには、地場産業も関わっていたり、祭りがあったりする。滋賀県の場合は、日常の中にアートがあると理解されてきたかな・・・と思う反面、何でも有りなの？という、その線引き、理解、意識をどのように整理するのかを考えなければと思っている。
- 滋賀県の中でいろいろなことに参加させてもらっていて、全体で言うと「美の滋賀」とまとまってしまうばいいのだが、そこをつなぐための MUSUBU SHIGA が、それも一つのブランドになってしまっていたり、ピワイチという観光のこともあったり、ココクールという言葉が出てきたり、美術館では「アートにどぼん！」という事業をやっていたりして、今、いろいろなことを出している最中で、県民に対して分かりやすく整理することが必要かなと思う。
- 同時に、地場産業に関わりながら、これからは今までのモノづくりではないと思うので、そこを「美の滋賀」と絡みながら、今までのビジネスではない形のヒントになればいいと考えているところ。
- また、新生美術館が身近なところになればいいと思いつつ、何もかもありすぎてどうしようかと思っている。

(保坂)

- 何でも有りの状況が続いているのはいいなと思っていて、それだけ出てくるのは底力があるからだろうし、そこに対して美術館、ミュージアムがどのように関わっていくのが重要になってくる。先ほどから、編集とか発信という言葉が出ているが、その機能を現・滋賀県立近代美術館がどう担っていくのか気になった。
- また、アサダさんがいろいろご覧になった団体の取組を美術館の学芸員が見ているかということを一瞬不安、疑問に思った。つまり、「美の滋賀」とそれを体現する装置としてのミュージアムが滋賀にはいくつかあって、とりわけ今、「美の滋賀」を体現する施設だという「新生美術館」とどうリンクしていくのが、もうそろそろ見えてこないといけない時期なのだろう。
- 2019年度のリニューアルオープンには、結構すぐで、美術館はイベントが重要なので、どのような方向性の美術館かということプレでやって、その時に、みんなにとっての美術館なのだということが分かるようなイベントになればと思う。
- 事業の中で面白かったのは「おうち映像ラボ」で、今、写真とか映像をいろんな地域から引き揚げて観るということはいろんな方がやっており、似たような話として、以前、エルビーバルチェンという写真史家というか、ニューヨークの州立大学の教授が提唱した展覧会を東京国立近代美術館でもやった。写真

という本来の機能を考えるとアート作品じゃなくてもいいでしょと、プロの写真家ではなく町の写真館とか職人さんなどが撮った写真を通して、写真とは何かを考えるものだが、匿名的な無名的な人の写真を美術館が紹介するようになってきている。なぜブレで方向性を示すイベントをやると言っているかというと、ブレだから自由にやれる。美術館も工事中は展示できない期間がある。その試行期間をうまく使って新生美術館の方向性、あるいはこれまでの蓄積を含む「美の滋賀」の方向性を見せて頂きたいと思う。

(上田)

■ブレの時に一緒に動いてくれそうな仲間、とりわけ今まで繋がっていなかったような層の仲間づくりの事業も重要。

(鷺田)

■質問だが、「地域の元気創造・暮らしアート事業」の団体数、予算規模は。

(事務局)

■委託事業は、広域化・ネットワーク化を目指す大きな取り組みであり、今年度は3団体が採択されている。上限200万円となっており、全体予算は600万円である。補助事業は、地域の美の資源を活用した取り組みを支援するものであり、今年度は10団体が採択されている。上限は150万円となっており、下は45万円から上は150万円まで交付決定している。全体予算は950万円である。

(鷺田)

■数字を質問したのは、アートと地域を組み合わせることで、地域をともに盛り上げていこうという事業だが、長い目で見た時に、人口が減少していく中、行政は財務状況もサイズも縮小していかざるを得ない。行政の仕事は、市民が自分たちの手で地域のことをやっていく、それを支える役割、活動を支えることではないか。事業主体を市民にもう一度戻す。近代以前の社会ならば、村のことは全部自分たちでやった。近代は行政が全部やるということで、市民がプライベートな利益、家族生活が安全だったらいいのだと地域のことを考えなくなった。人々が主体になるということが大事だと思う。

■私が2年前に「美の滋賀」を提言して、その翌年、船に乗り沖島に行ったときに、参加者の半分ぐらいが他所の人、他所から滋賀県に移住してきたアーティストや写真家、京都でレストランをやっていた人などさまざまな人がいて、その人たちが初対面なのに船の中で結構盛り上がっていた、あれを育てていく、つまり、自分たちで勝手にネットワークを作って、機会さえ提供したら、勝手にいっしょにやろうというようなことが起こっていく、それにアートが媒介になっているというイメージで、それを育てていくのがこの事業かなあと思っていた。

■誤解していたら申し訳ないが、「地域の元気創造・暮らしアート事業」は選考を行っており、地域に偏りが出ないように考えられているような気がする。本来、行政がやるのだから大事なことだが、それを意識しだしてお金の分配という考えでいくと行政の事業になってしまう。それがちょっと気になる。地域創造とか、文化庁が全国の事業に補助金を出している、あれがまさにそうだが平等になる。私自身が仙台のある文化施設で仕事しているが、だんだん行政の補助金をあてにして予算を立てていく。個々の事業体もだんだん組織っぽくなっていく。ひょっとしたら文化庁の補助事業、あるいは地域創造がやっているような事業になっていかないかなと気になる。あの時、船の中や沖島でみんながキャッキヤ、キャッキヤ言っておられたのを大事にしたい。

■もう一つは、「美の滋賀」が見えにくいそれはそれでいい、一番大きな風呂敷でいいのだという意見があったと思うが、まず滋賀の美、滋賀の特質ということを見ると、我々（「美の滋賀」発信懇話会）が作ったように、アール・ブリュットと仏教美術等とモダンアートを一つにつなぐようなコンセプトと他方では、

美術、美術でなくてもいいので、まさに糸井重里さんのコピー「おいしい生活」、漢字で書く「美味」ですから、そのようなところで、今回鮎ずしの話もあったが、生活感が滋賀県はおいしいという、隣の福井県は数字では数年前までは日本一満足度が高かったが、滋賀は数字なんかではなくて、そこに住んでいる人の活動とか、市民生活とか、施設の中の生活とか、水とかいろいろなことを考えて、滋賀で暮らっていていいということに「美」が繋がっていったらいいと思う。

- 外から引っ越した人は、地元の人が当たり前で見えていないものが、すごく新鮮でわざわざ都会から滋賀へ引っ越してこられた訳だし、だから、「美」を発見するというのはある意味で、半分は外から来た人の目、半分は本当に地元のことに詳しい人の目の出会いが大切。外から移ってきた人の目を借りる、使うのも大事なことかと思う。その中で新しく発見して作っていったらいいように思う。滋賀の美はこれですって過去に向かって発掘するばかりではなくて、これからの暮らしの中でこれからの時代、課題ばかりの時代だが、滋賀県でまともな生活ができる、そんなに贅沢でなくてもいい、満足度の高い生活ができるということとつなげていけばいいと感じた。

(上田)

- 事業選定の時は、地域性は考えなかった。大津は舞踊のすごい方が出てこられて、実は書面審査では点数が低かったが、「音楽があればどんなものでも踊ってみせます！」とおっしゃって、そのプレゼンをパフォーマンスに度肝をぬかれた。過去の美の滋賀事業の中にはなかったような可能性、逆説的だが、美の滋賀の概念をゆさぶり押し広げるような、今までになかった取り組みだということで選定された。「おもしろい！」という事業を中心に選んだ。地域のバランスが取れているように見えるのは偶然だと思う。
- 数年前に美の滋賀にかかわる人と人のネットワーク事業に取り組んだ。その後少し怠けてしまっているが、鷺田先生を招いた船出の集いであの時みんながワイワイ言って、最後に鷺田先生がされたコメントで覚えているのが、「ここには一人も美術の専門家がない、だから成功する」とおっしゃった(笑)それでずいぶん勇気づけられた。

(鷺田)

- そんなこと言ってた？

(上田)

- そんなことをおっしゃっていました。(笑)話は変わりますが、MUSBU・SHIGAでは、ブランディングディレクターに服部さんといういわば外の方が招かれたことが面白い。その、服部さんが発信するメッセージに今度は内(滋賀)の人がどう応えるかということがある。
- 今度、東京原宿のVACANTに行かれる魚治さん(高島市で鮎ずしを作っておられるお店)などは、美の滋賀を体現するような人でとってもカッコいい。「私は鮎ずしを作っているのではなく、桶の守りをしているだけです」とおっしゃる。私はこれも美の滋賀だと思う。滋賀の暮らしの日常を代表するような美「無事的美」というような。

(アサダ)

- 鷺田先生がおっしゃっていただいたところで言うと、事業を一つ一つ調査に回らせていただいた時の現場レベルでワイワイした感じは実際ある。その中で、参加者が外部から来られていたり、場の設定によって交流があったりということを感じながら、一方でこれを言葉にしていく、ワイワイしているところを言語化していくのが本当に難しい。私に関わっていて思うのが、3団体が委託、10団体が補助と分けるのではなく、もともと取組が生まれていたところに後からこの事業ができたと思っている。というのは、湖北アール・ブリュット展推進会議や芸術村 in 余呉実行委員会が、エナジーフィールドと組み、中田洋子さんが新しい

展示を行うとか、保坂さんが関心を持たれていたおうみ映像ラボなどは地域にある映像を扱うので、いろいろな地域に入り込み、各団体からフィルムを集めるような取組であるとか、事業の枠組みとして推進するより、自然につながりが生まれている。それをさらに外に発信し、滋賀ってすごいよって言うときに一つ一つ言葉につなげていくと、ワイワイの部分が抜け落ちてしまう。関わっている者として非常に悩みどころ。現場では、鷺田先生がおっしゃっていることが本当に起きている。「美の滋賀」の事業に限らず、おそらく他の事業でもこのような悩みが起きていると思う。

(北川)

- 入って見ないと分からない。それをどう伝えるかという悩み。

(鷺田)

- 他所の人をうらやましがらせる何か。今日は、お話を聞いて良かった。結構、つながっているということですね。

(アサダ)

- はい。実際、結構つながりが起こっています。

(上田)

- 北川さん、今わりと人気があって、私が滋賀県のお土産みたいにして使っているしがトコのカレンダーもいろんな人のつながりによって作られているんですね。

(北川)

- はい。滋賀県作のカレンダーはそれぞれが滋賀の魅力を写真で撮って web に投稿して、投票によって決定された作品がカレンダーになっています。これも「美の滋賀」がきっかけ。今の話のワイワイという、うごめきをどう伝えるか。この3、4年「美の滋賀」で随分変わった。地域は元気、何をやってもええんや、みたいな。

(鷺田)

- それ大事。

(木村)

- 先ほどいい取組をスライドで見せていただき、また、「美の滋賀」の入り口の「新生美術館」ができることに伴い、県からきちんとした形で補助金が出て、補助という後ろ盾があることで取組を一步前進させている。予算化はいつからですか？

(事務局)

- 平成 25、26 年度とモデル事業を実施。そして、平成 27 年度「地域の元気創造・暮らしアート事業」として実施している。

(木村)

- そうですね。2 年前ぐらいからですね。事務局の説明を聞いて、いろいろな地域で活動がより活発になってきていると感じた。滋賀県は（いいものを）出したがらないというか、出さない。恥ずかしいのが先に立つのか、ええ恰好しない。滋賀県の県民性というか、湖があるがゆえに4つの区域に分かれてしまって気

候も風土も食べ物も言葉も違う。そのようなものが「美の滋賀」の推進で、いろいろなところで眠っていた、いろいろなところで好きな人だけがひっそり活動していたのが、県の発信でより結び付く。

- 今までは、暮らしの中にあるよいものに、目をぱあっと開くことが無かったのではないか。「新生美術館」が、表に出てきて、アートに対して県民もこうしようということが出てくると思う。
- 文化経済フォーラムで「文化で滋賀を元気に賞」を毎年選んでいる。最初の時に鷲田先生に来ていただいた。先ほどの報告でもあったが、余呉などは潜在的な活動がある。表彰の時に、このような取組に目をつけてもらってありがたいという声が寄せられる。表彰されると生きる力というかもっとやろうという意欲につながる。もっと地域に対する関心、あるいは、もっと目を広げてもらおうと考えると、このような補助事業は予算を削られないようにしなくてはならない。滋賀県の文化力をアップする上で非常によい事業。
- 滋賀県は観光と文化財とが表裏一体だし、文化とも表裏一体。滋賀の場合、仏像、神社仏閣は人々の生活の中にあるから、案内にも時間がかかるが、一方では良さでもあるので具体的にどうしていくのかということが今後の大きな課題かと思う。
- 「美の滋賀」の理念を物語の中で表現していくのは難しいが、地域のあちらこちらで、このようにいろいろな団体の活動が行われているのは頼もしい。

(池永)

- 今日は先生方から本当に勉強になるお話を伺った。私は1月までずっと東京だった。先生方のお話を聞いて、文化を通じて人とつながる。人のつながりは文化を呼び、文化が人とつながるきっかけになる。滋賀らしさを発見するには外からきてもらう。外から来てもらうことにより、滋賀の人はますます滋賀の良さを発見するという観光にも力を入れていきたい。「美の滋賀」、「アール・ブリュット」をあらゆる機会に発信していきたい。予算は厳しい面もあるが、何かあれば、いつでもどこでも「美の滋賀」と言っていく。デジタルアーカイブもいいと思う。みんなが参加できるイベントも検討したい。

(3) 新生美術館について

- ・スライド等により説明

(4) 滋賀県版文化プログラムについて

- ・配布資料について説明

(北川)

- 「みんなで創る美術館プロジェクト」に関わらせていただいている。効果的な取組だと思う。「アートにどぼん！」は本当に多くの方が来られている。北部の人は、初めて美術館に来たという人もいる。間口を広げる取り組みが大事だと思っている。「おでかけミュージアム」では、ファブリカ村にピカソ、マチスなどの版画30点を持ってきてくださり、学芸員の解説を聞いた。30人の定員で83人来られて大変だった。美術館がこんなことをしてくれるのかとみなさん驚いていた。まだまだ美術館のことが知られていない。これらの取組は美術館を知っていただくきっかけとなる。

(上田)

- 「アートにどぼん！」は、一般人にとってはまだまだ非日常の場である。美術館に一般人が入り込んでいて、美術館の日常を破る、言ってみれば美術館にとっての非日常をつくるという面白さがある。それから一方で今、県内にたくさんある私設であったり、地域コミュニティで運営されている美術館、博物館は、個人や地域の人々が志を持って作られたものが、設立者が高齢になるなどして崩壊の危機を迎えている。そこにつながり、支える人が必要。また、支えるということではサポーター、人を活かしたり育てるという

部分で、例えば、鮒ずしの左寄（ささき）さんは、MUSUBU SHIGA でも出てくるし、「美の滋賀」でも出てくるし、観光や食べ物でも観光でも出てくる。この人が「美の滋賀」を体現している。このような人がまだまだいっぱいいらっしゃる。ここにいる北川さんもその一人。「この人がまさしく「美の滋賀」です」というようなサポーター、ネットワークを作っていけたら面白い。

（鷺田）

- きっとキーパーソンがいると思う。

（保坂）

- 木村さんの発表を聞いて、すごい人がいっぱいいると思った。それを発信していくことが必要。県立の美術館がこのような活動をしているのは他にあまりないような気がする。バラバラの県内をまとめようとしているのはすごい。バラバラというのは、美術館を考える上でキーワードとなる。そもそも美術館はバラバラのものを寄せ集めるところ。今、それに気づかされて、滋賀はそのバラバラ度合がすごい、元気の良さとか無謀さ、一方で滋賀の場合、仏教美術は地域に結び付いていたけれども、アール・ブリュットとくっけるとい、すごいことをやろうとしている美術館なのだということをもっとアピールした方がいい。先ほど滋賀の人はいい恰好をしない、出さないという話があったが、アピールしたほうがいい。結構すごいことになると思っている。

以上